

京都大学アジア研究教育ユニット  
平成 25 年度次世代研究プロジェクト

明治期の国語—速記資料を中心に—

Albeker András Zsigmond

(京都大学大学院文学研究科国語学国文学専修)

2014 年 8 月

## 明治期の国語—速記資料を中心に—

### Japanese Language of the Meiji Era - Focusing on the Stenographic Materials

キーワード：近代語、講演、雑誌、速記、文末表現

#### 0 はじめに

明治期に入ると、社会的制度の変化・交通の発達・外国との交流・西洋文化の影響などが日本語の書き言葉・話し言葉にも影響を及ぼすと共に、言語資料も増加・多様化していく。この時期に初めて出現した資料群には速記資料、録音資料、新聞・雑誌の総合資料がある。

速記資料は資料の数が膨大であるためか、その調査・研究はまだ不十分であると言える。また、速記資料の作成過程に関しても幾つかの問題がある。

本稿の前半では演説速記の成立過程について陳べ、後半では明治時代の知識層の演説・講演に基づいている論説記事における文末表現の調査結果をまとめることにする。

#### 1.1 速記について

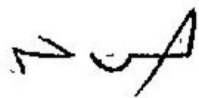
速記とは、言葉を発言のまま即座に書き取る表記法の事である。具体的には話された文章をそのまま文字化したり、一定の方式で簡略化したり、常用される表現を符号化したりして、口述された文章をできる限りそのまま写してゆく方法である。速記符号を二種類に分類することが出来る。「基本文字」とは、表音的な符号の事で、速記法の基礎となる。「略語」とは、頻繁に使われる単語・語句などを簡単な符号を以て表記する表語的な書き方である。【例1】では音節に対応する基本文字は連続され、「オソレナイ」と言う語をなす。【例2】では当為表現「～ケレバナリマセン」は「ケレバ」と「ナリマセン」を表す二つの略語によって表記されている。

【例1 基本文字】



「オソレナイ」

【例2 略語】



「～ケレバナリマセン」

若林珮蔵<sup>かんぞう</sup>(1886)『速記法要訣』より

日本では既に幕末・明治初年から速記に関する紹介・解説があった。  
堀達之助編『英和对訳袖珍辞書』(1862年)に

「short-hand 語ヲ簡畧ニスル畫法 / short-hand-writer 全上ヲ以テ畫ク人 /  
stenography 早畫キヲスル術」<sup>1</sup>

という項目が見受けられる。また、黒田行次郎校正『増補和解西洋事情附録』(1868年)に

「疾書術 ステノガラヒー 疾書術ハ近代ノ發明ナリ都テ筆ヲ攬テ事ヲ記スルニ速カ  
ナルヲ電光ノ雲ヲ射ル如シ其法通用ノ二十六字ニ代ユルニ一種ノ符號ヲ以スコレ唯々縦  
横斜直ナル小直畫ト大小向背ノ半月形及ヒ一個ノ小圈ノミ又語ノ首尾を畧省シ熟語復用  
ナドヲ一字ニシ其他種々ノ繁ヲ舍テ簡ニ就クノ法アリ……」

と速記法が紹介されている。

明治時代に入ってから西洋の速記法を翻案する試みも行われ、1882年になると田鎖綱  
紀がGraham式に基づいて『時事新報』にて「日本傍聴記録法」を発表した<sup>2</sup>。その後、講習  
会を開き、速記の普及に努めた。田鎖の弟子若林珪蔵・林茂淳等が速記法を改良しながら、  
演説・落語などの筆記を始めた。初期の速記資料の代表的な例を挙げると、『經國美談 後  
編』(1884年)、『怪談牡丹燈籠』(1884年)、『速記叢書講談演説集』(1886年～1887年)等  
があり、更に1890年から帝国議会にも速記が採用された。

## 1.2 速記法・速記資料に関する問題

速記資料は次のような過程を経て作成されると考えられる。

(原稿) ⇒ 演説 ⇒ 速記 ⇒ 反訳 ⇒ 整文 ⇒ (校閲) ⇒ 印刷の準備 ⇒ 雑誌掲載 ⇒  
(再掲載)

「整文」の程度は資料のジャンルもしくは編集方針によって異なると考えられるが、こ  
れに関してさらなる調査が必要である。「速記法」「整文」「再掲載」に関しては先行研究に  
よって幾つかの問題点が既に指摘されている。

---

<sup>1</sup> 引用などの表記に於いては変体仮名を現行仮名に換えたが、漢字を可能な限り旧字体のままにした。

<sup>2</sup> 「…漸ク今年ニ至リ簡單ナル一法ヲ考出シ一百有餘ノ單音記號二百有餘ノ復音記號ヲ製シ之ヲ  
轉用シテ如何ナル混雜シタル萬般ノ記事論文俗談平話ト雖トモ容易ニ差支ナク記録シ得可キノ  
法ヲ考定セリ…」明治15年9月19日

・清水康行氏（1983年）は『怪談牡丹燈籠』において文法上の不統一（音便・音訛・接続の「ば」）が見受けられ、速記本作成の段階で直された可能性があるということを明らかにした。又、同氏（1998年）は若林珮蔵の『速記法要訣』（1886年）に「近い・近き」の様に複数の語形を一つの記号に統合するもの（同一符号）があり、文体判定に影響を与え得ることを指摘している。

・佐久間俊輔氏（1991年）は『速記叢書講談演説集』に再掲載された演説とその初出誌の間に異同があり校閲で手が加えられた可能性があることを明らかにした。速記録は口頭語そのものではなく、幾重にもフィルターのかかったものであるということも指摘した。

本稿は演説速記の成立について確認するため速記字原稿に遡り、雑誌掲載文との異同がどの程度であるか、調査を行った。

## 2.1 資料と調査結果

調査資料として選択したのは以下の速記入門書と雑誌・新聞である。速記入門書は、国立国会図書館と日本速記協会のホームページに掲載されたデジタル版を、雑誌・新聞は国立国会図書館のデジタル版、愛知県立図書館・京都大学附属図書館所蔵のものを利用した。

演題	掲載誌	発行年	速記入門書	発行年	演説者
日本傍聴筆記法の効用を述 ふ	東洋學藝雑誌	1885	ことば乃寫眞法	1885	源綱紀
英吉利法律學校開校式ノ景 況	明法志林	1885	速記法要訣	1886	福澤諭吉
最早言論集會の自由を十分 に與へられては如何	自由燈	1885	新編大日本傍聴筆記 恣與便	1886	烏々道人
人を使ふには其氣を使ふべ し	自由燈	1885	新編大日本傍聴筆記 恣與便	1886	烏々道人
國會の議事筆記に關する意 見	速記彙報	1890	独學自在日本速記法	1886	吉木竹次郎
速記法研究會懇親會場に於 いて	速記雑誌	1890	速記術	1893	加藤弘之
速記法研究會懇親會場に於 いて	速記雑誌	1890	速記術	1893	山田喜之助

このように調査の対象となる演説は 1885 年と 1890 年に掲載されたものである。しかし、速記入門書に於いては、全文ではなく、記事の一部のみが掲載されているものもある。速記字原稿と雑誌掲載文の題名が異なる場合もあった。

・「日本傍聴筆記法の効用を述ふ」は『東洋學藝雑誌』では「日本傍聴筆記法のはなし」と題名が変えられている。

・「英吉利法律學校開校式ノ景況」の速記実例に 5 頁から 6 頁迄欠頁がある。

・「最早言論集會の自由を十分に與へられては如何」は『自由燈』に 2 日に亘って連載されたが速記実例は一日目の文のみ。

・加藤弘之と山田喜之助の演説は全文ではなく、抜粋のみが速記実例になっている。

速記実例と雑誌掲載文の異同を調査すると主として以下の点において相違が見受けられる<sup>3</sup>。

#### ① 助詞・語・句などの削除

速記字原稿「ドーン、ジーグントーを」⇒ 雑誌「働詞の法及ひ時限 〇を」

「日本傍聴筆記法の効用を述ふ」より

速記字原稿「スミからコテ々々ト一キョー迄」⇒ 雑誌「奥から 〇東京まで」

「國會の議事筆記に關する意見」より

---

<sup>3</sup> 速記実例の用例を引用する場合は基本文字をカタカナで、略語を漢字及び平仮名で表記する。

速記字原稿「アルイワゼンゴシタ」⇒ 雑誌「Ø前後した」

「速記法研究会懇親會場に於いて」（加藤弘之）より

## ② 助詞・語・句などの挿入

速記字原稿「ヒロシと雖Øジカク多して」⇒ 雑誌「廣しと雖も其字畫多くして」

「日本傍聴筆記法の効用を述ふ」より

速記字原稿「フルイØガクシャノウチでも」⇒ 雑誌「古い所の學者の中でも」

「速記法研究会懇親會場に於いて」（山田喜之助）より

速記字原稿「ヒッキカタにわØニシウアローと考ます」⇒ 雑誌「筆記方には凡そ二種あらうと考へます」

「國會の議事筆記に關する意見」より

## ③ 語・句などの変更

「人を使ふには其氣を使ふべし」で速記で「ショーギ」を書いて反訳で「娼妓」と漢字に直されたが、新聞に掲載する際に「おいらん」とふりがなが付け加えられたことで、訓読みが音読みへ変更された。他に音読みが訓読み、または訓読みは別の訓読みに変更された例もある。



なお、文末の書換の用例も見受けられる。「最早言論集會の自由を十分に與へられては


如何」では基本文字「モーサナ」と略語「ければなりません」は雑誌では「<sup>まを</sup>申さなければなりませんまい」のように文末が書き換えられている。

「國會の議事筆記に関する意見」では基本文字「デキヌ」と略語「であります」は反訳した後「出来ませぬ」の様に変えられた。

#### ④ 略語による語形の揺れ

「日本傍聴筆記法の効用を述ふ」の速記字原稿では基本文字と「しき」を表す略語で「オ

ソロしき」と書かれており、雑誌では「怖ろしき」となっているが、同じ表記法で書かれた「イソガしき」は雑誌では「忙しひ」となっている。つまり、形容詞の語尾を表す略語は「しき」「しい」の二つに対応しており、文体判定に影響を及ぼし得ると考えられる。

「國會の議事筆記に関する意見」の速記では「思う」「て」の二つの略語は「思ッて」をなすが、速記入門書の反訳で「思ふて」となっている。このように、ウ音便と促音便の揺れが見受けられる。

以上のことから、反訳の際の添削・整文作業はその程度が記事によって異なっても、語彙・文体・文法に影響を与えるため速記資料を話されたままではないということが確認できた。

### 3.1 講演速記の調査資料と調査法

文末表現の調査資料としたのは1881年から1930年まで毎月刊行された『東洋學藝雑誌』である。記事内容は多岐にわたり、自然科学関係の論文の他、国語国字問題、言語に関する記事や、初期の頃は文学作品も掲載された。又、学会記事、批評などの欄も設けられている<sup>4</sup>。『東洋學藝雑誌』の演説速記に関する研究は調べた限り多くはない。

- ・原口裕氏（1972）が本誌とその他3種の雑誌における「です」の用法の実態を調査した。
- ・塩澤和子氏（1979・1980年）が演説における助詞・助動詞・動詞・形容詞・副用言を口語文典への統一と言う観点から考察した。尚、同氏は（1982）演説速記の語彙の調査も行った。
- ・長崎靖子氏（2001年）が、本誌の他『速記叢書講談演説集』と『速記雑誌』を資料とし、識者たちによる「です」の使用を論考した。

調査に用いたのは、京都大学附属図書館と愛知県立図書館に所蔵されている合冊本と『東洋學藝雑誌』のCD-ROM版（大空社、2011年；PDFファイル式）である。

調査期間を講演速記の始まった1884年から1894年までとし、サンプルとして3年ごとに口語体の講演・演説速記を任意に5本ずつ取った。しかし、1884年刊の口語体の講演速記が少ないため、1885年の号も合わせて利用した。又、連載した記事を一つとして扱った。今回の調査で文末表現を合計3375例採取した。

今回選択した記事は【図1】の21本である。その中に筆記者もしくは会場が不明な場合もあるが、1884の『人ノ發音ノ理』と『炭素の変化』は『日本速記百年記念誌』の年表によると、林茂淳によって速記されたようである。

採取した文末を年別に整理し【図2】、常体と敬体に分けて考察する。なお、文末で種々の活用形が用いられているため、例えば「です」「でした」「でしょう」等を「です」の類として一つに纏めるようにした。「でござります」類と「でございます」類は一つに扱った。

---

<sup>4</sup> 『東洋學藝雑誌』について詳しく『日本近代文学大事典 第五巻』（1977）と深萱和男（1972）「明治の国文学雑誌—東洋学芸雑誌」を参照。



年	掲載号	演題	講演者	講演者の出身地	速記者	講演会場	講演日時
1884	34-35	人ノ発音ノ理	村岡範為馳	鳥取県	林茂淳?	理医学講談会	1884. 6. 1.
	34-38	炭素の変化	桜井錠二	石川県	林茂淳?	理医学講談会	1884. 6. 1.
	39	羅馬字会を起すの趣意	外山正一	江戸	?	?	?
1885	44-45	地球の位置	寺尾寿	福岡県	林茂淳	理医学講談会	1885. 3. 21
	50	地震ヲ前知スルノ法如何	関谷清景	岐阜県	?	理医学講談会	1885. 11. 7.
	51	磁石の談	村岡範為馳	鳥取県	?	理医学講談会	1885. 10. 4.
1888	76	研究の説	中沢岩太	福井県	?	大学通俗講談会	1887. 12. 4.
	76	病氣ノ話	三宅秀	江戸	?	大学通俗講談会	1887. 11. 19.
	80	精神ノ養生	大沢謙二	愛知県	友野庄三郎	第一高等中学校	1887. 4. 20.
	83-84	治外法権の話	鳩山和夫	岡山県	林茂淳	大学通俗講談会	1888. 5. 6.
	84	女生徒の心得	矢田部良吉	静岡県	?	東京高等女学校	1887. 9. 11.
1891	114-115	脳病の話	弘田長	高知県	平野勝巳	大学通俗講談会	1890. 10. 5.
	115-116	生死の話	大沢謙二	愛知県	平野勝巳	大学通俗講談会	1890. 11. 9.
	116-117	欧洲哲学ノ近況	井上哲次郎	福岡県	速記社社員	大学通俗講談会	1891. 3. 21.
	116-117	本邦産牛乳の効用に就て	丹波敬三	兵庫県	秋田荘次郎	大学通俗講談会	1890. 12. 7.
	121	所謂子女教育資金に付て・商法第六百八十三条に付て	藤沢利喜太郎	新潟県	秋田荘次郎	大学通俗講談会	1890. 11. 9.
1894	148	作文の心得	物集高見	大分県	?	大学通俗講談会	1893. 6. 11.
	148-149	快楽ノ種類及其性質	元良勇次郎	兵庫県	?	大学通俗講談会	1893. 11. 25.
	152	「アイノ」ノ話	小金井良精	新潟県	?	大学通俗講談会	1894. 3. 24.
	157	渦環(Vortex Ring)	後藤牧太	愛知県	尾張捨吉郎	東京府教育常集會	?
	158	神經ニ就テ	三浦謹之助	福島県	?	?	?

【図 1】

年	常体総数	ダ 類	デアル類	ナリ 類	名詞		敬体総数	デアリマス類	デアリマスル類	デゴザリマス類	デゴザリマスル類	デゴザル類	デス 類
1884	105	1	2	44			365	63		10		7	33
1885	215	1	10	82			446	67	18	9			48
1888	130	1	36				380	100	1	6		1	50
1891	543	3	138	1	2		596	161		8			41
1894	190		34		1		405	97	8	16	2		47

【図 2】

### 3. 2. 1 調査結果（常体）

まず、常体の文末表現を見ると、1884・1885 年には「デアル類」の数が少ない上、主として否定形で使われていることが分かる。

「併シ如何ニ固有音ナレバトテ何モ原因ナク自分獨リデ鳴ル譯デハナイ」

『人ノ發音ノ理』より

「併シ此笛ニテ出ル音ハ是レーツデハナイ」

『人ノ發音ノ理』より

「其の間に非常に小さな惑星があります、其の数は夥しいこと、今日まで発見になりましたのだけか二百いくつ、といふ程ありますか、其れでおしまひでは無い、」

『地球の位置』より

同時に文語調の文末表現の用例が多く見られ、「デス」「マス」(波線で表示)と混用されることがある。

「第一ハ共鳴ト申スコトデス即チ一ノ物體カ外ノ物ト共ニ鳴ルト云フナリ」




『人ノ發音ノ理』より

「其譯は上層の液は「アルコール」にして蠟より輕きもの又下層は水にして蠟より重きものなればなり今この中へ棒を入れて攪き雜れば二種の液體全く混合して一様のものを生じます」

『炭素の變化』より

「底で我々は直ちに磁石をソレノイードに近くれは如何と云ふ疑問を起すなり私は今其試験を施して見ませふ」

『磁石の談』より

この様な文語調の文末表現は書き直しによって生じたということも考えられるが、当時の速記入門書、例えば 1885 年の『ことば乃寫眞法』では「也」を表す略字、「者ナレバナリ」、「スル所ノ者ナリ」等の様な略文もあるので、演説に於いて実際にこのような表現が使われたという可能性は排除できない<sup>5</sup>。

しかし、1888 年以降「ナリ」や「アリ」「ベシ」等が殆ど現れず、代表的な文末として「デアル類」が台頭してくるようになった。

---

<sup>5</sup> 東京速記士会理事の福岡隆によると「私の習得した速記法(田鎖式)には、基本文字のほかに、約八百語の略字がある。この略字は、頻繁に出てくる語を簡単に表記するための略符号だが、今日ほとんど使わなくなった略字もいくらかある。それらの大部分は文語的表現の語だ。(中略)私の永年の経験から言えば、語尾、助字の変化がいちばん激しく、これも文語的用法が引用文のとき以外にはほとんど消え去っている。」

福岡隆「速記符号からみたことばの変遷」『言語生活』1981 年 8 月

### 3.2.2 調査結果（敬体）

敬体では、「デアリマス類」は21本の全てに使用され、「デス類」は18本の演説で使われている。【図3】

年	演題	敬体総数	デアリマス類	デアリマスル	デゴザリマス類	デゴザリマスル	デゴザル類	デス類	動+です	動+のです	動+でしょう	形+です	形+のです	形+でしょう
1884	人ノ発音ノ理	151	18		4			24					1	1
	炭素の変化	170	43					3						
	羅馬字会を起すの趣意	44	2		6		7	6						
1885	地球の位置	237	53	1	7			36	3	2		2		
	地震ヲ前知スルノ法如何	116	5	17	1									
	磁石の談	93	9		1			12						
1888	研究の説	78	25					14		4				
	病氣ノ話	169	53		5		1	2		1				
	精神ノ養生	27	8											
	治外法權の話	61	5	1				28	9	2	1	1	1	
1891	女生徒の心得	45	9		1			6						
	脳病の話	119	25					1						
	生死の話	172	45					27	1	3	1	3	1	
	歐洲哲学ノ近況	180	60		5			6	1					
	本邦産牛乳の効用に就	69	17					4				2		
1894	所謂子女教育資金に付て	56	14		3			3						
	作文の心得	38	13											
	快楽ノ種類及其性質	78	36					22	21					
	「アイノ」話	138	24	8	16	2		14	1	2			2	
	渦環(Vortex Ring)	85	8					8						
	神經ニ就テ	66	16					3			1			

【図3】

大正時代に編纂された『口語法別記』によると、「デス」はもともと遊里関係の人たちの間で使われ、イメージが良くなかったが、明治になってから地方出身の武士がこの言い方を真似して、広く使われるようになったと述べている<sup>6</sup>。今回の調査結果で明治中期になると演説や講演といった改まった場面でも「デス」が既に使われていたということが確認できた。『東洋學藝雑誌』の演説における「デス」の特徴を纏めてみると、

①「デス類」の総数は219例であるが、「デシタ」は僅か5例、「デショウ」は11例のみであり、活用形は「デス」に偏っている。

②「デシタ」の内訳は、体言に付く例2つ、「マセンデシタ」2例、「～ナイデシタ」1例で

<sup>6</sup> 「「です」わ、随分古くから、つかつて来た語のようであるが、江戸でわ、元と、芸人言葉で、軽薄な口調の「でげす」など、同じもので、明治以前わ、咄家、太鼓持、女芸者、新吉原の茶屋女などに限つて、用いられて居たもので、その女が素人になつても、「です言葉」が出て、咎められて、困つたもので、町人でも、身分のある者わ、男女共に、用いなかつた。それが、今のうちに、遍く行われるようになったのわ、明治の初に、田舎の武士が、江戸へ出て、柳橋、新橋あたりの女芸者などの言葉で聞いて、江戸の普通の言葉と思つて真似始めたからの事であらう。それであるから、余り馨ばしくない語でわあるが、今でわ、身分のある人々まで用いられて、もはや止められぬ程の言葉となつた。」

ある。

「併し遠方から拝見しました譯でありますから、諸君の頭の中の模様また學力がどの位あるか其れも分からないでした。」 『治外法権の話』より

「所ガ初メノ一學期丈ハ聞手ガアリマシタガソレカラサッパリ來聽人ガアリマセンデシタ、」 『欧洲哲学ノ近況』より

③ 「デショウ」は体言（4例）、動詞（3例）、形容詞（1例）の他形容動詞、副詞に付く。

「然ラハ此音釵ノ音ハ此長サノ空氣ノ持前ナル音ト云フテ宜シイデセウ」 『人ノ發音ノ理』より

「それで忘るればもうろくでもしたと云ふものでせう」 『研究の説』より

「多分兩方で己が彼を産んだと思て居るでしょう」 『生死の話』より

④ 「デス」は主に体言・形容動詞に接続するが、形容詞に付く例は8つあり、その中5例は「ナイデス」である。その他は「大きい」「多い」「少ない」という形容詞である。

「即ち子を作る仕掛がないです」 『生死の話』より

⑤ 又、「デス」に「の」を介入せず動詞に直接付くという、規範的な用法から外れる用例（36例）も見受けられる。

「併し海もあり陸もあることは慥にしれて居るです」 『地球の位置』より

「税關で其の届けを受けたら何時間かの中に噸税を取ると云ふことになって居るです。」 『治外法権の話』より

「日本人ガ北海道へ澤山行クニ從ッテ雜種ハ益々多ク出來ナケレバナラヌト思フデス、」 『「アイノ」ノ話』より

#### 4. おわりに

今回の調査で速記字原稿と雑誌の比較によって速記は話のままではないということが確認できた。今後は国語学研究に於ける速記字原稿の更なる活用について検討したい。文末表現に関しては他資料との比較検討を行い、明治中期の知識層の言葉の実態調査を探究していきたい。

## 参考文献

- 浅川哲也（1999）「形容詞承接の「です」について—形容詞述語文丁寧体の変遷」  
『国学院雑誌』第100巻5号
- 兼子次生著（1999）『速記と情報社会』中公新書
- 国語調査委員会編纂（1916）『口語法 全』
- 国語調査委員会編纂（1917）『口語法別記 全』
- 佐久間俊輔（1991）「草創期の演説速記—活字化の際の改変をめぐって」  
『日本近代語研究1』ひつじ書房
- 塩澤和子（1979-1980）「言文一致体の成立—演説速記の果たした役割（一）（二）」  
『上智大学国文学論叢第12・13号』
- 塩澤和子（1982）「演説の語彙」『講座日本語の語彙第六巻近代の語彙』明治書院
- 清水康行（1983）「言語資料として見た速記本「怪談牡丹燈籠」における二重性」  
『創立20周年記念鶴見大学文学部論集』
- 清水康行（1998）「速記は言語を直写し得たか—若林珅蔵『速記法要訣』に見る速記符号の表語性—」『文学』第9巻 岩波書店
- 武部良明（1951）『国語速記史大要1』日本速記協会
- 中村通夫（1948）『東京語の性格』川田書房
- 野村雅昭（2000）「口語資料としての明治期落語速記」『早稲田大学大学院文学研究科紀要  
日本文学演劇美術史日本語日本文化』第3分冊
- 長崎靖子（2001）「明治期の速記資料に見える「です」」『日本語論叢第2号』
- 原口裕（1972）「「デス」の推移—活用語に接続する場合—」  
『静岡女子大学国文研究第5号』
- 飛田良文著（1992）『東京語成立史の研究』東京堂出版
- 福岡 隆（1978）『日本速記事始—田鎖綱紀の生涯—』岩波新書
- 藤倉 明（1982）『ことばの写真をとれ—日本最初の速記者・若林珅蔵伝』さきたま出版会
- 諸星美智直（1986）「国語資料としての帝国議会議事速記録—当為表現の場合—」『国学院  
大学大学院紀要—文学研究科—』17輯
- 山本正秀（1982）『近代文体発生の史的研究』岩波書店
- 若門会編（1926）『若翁自伝』若門会

## 資料

『時事新報』1882年9月19日（竜溪書舎による復刻版）

『自由燈』1885年9月3日（第355号）・4日（356号）・6日（第358号）（不二出版による復刻版）

『速記彙報』1890年（第14冊）

『速記雑誌』1890年（第6号）

『東洋學藝雑誌』1884年・1885年・1888年・1891年・1894年

『明法志林』1885年10月1日（第105号）

金山秀澂・志田爲三郎(1886)『新編大日本傍聽筆記法與便』東京明進學校藏版

黒田行次郎校正（1868）『増補和解西洋事情附録』

丹羽瀧男（1890）『獨學自在日本速記法』雙々館

堀達之助編（1862）『英和对訳袖珍辞書』

丸山平次郎(1885)『ことば乃寫眞法 一名筆記學階梯』英學自宅獨習會

若林珣藏(1886)『速記法要訣』速記法研究會

若林珣藏(1893)『速記術』速記法研究會

平成 25 年度次世代研究プロジェクト「明治期の国語—速記資料を中心に—」（研究代表：Albeker András Zsigmond）による成果である。

【メンバー】

Albeker András Zsigmond（京都大学大学院文学研究科国語学国文学専修博士後期課程）

【活動の記録】

2013 年 12 月 7 日 平成 25 年度京都大学国文学会にて発表。発表題：「明治期の講演速記」  
発表要旨は『京都大学國文學論叢第 31 号』に掲載。

2014 年 8 月 24 日 第 38 回速記科学研究会 速記・言語科学研究会にて発表。発表題：「近代語資料としての速記」  
発表要旨は『日本の速記』に掲載予定。